

## 言語の論理 (下の中)

——文章上下の呼応の問題の一環としての主語をめぐる助詞「は」

「が」に関する諸問題——

井 上 寿 老

### 1) 序 説

文章が有機的なものであることは今更説くまでもないが、その有機性の中核は呼応に在る。之を謂って呼応は文章の命脈なりと為すも過言ではない。故に一たびその呼応に失するときは、之を大にしては達意（コミュニケーション）に支障を来たし、之を小にしては甚だかたわなもの（不詞）となる。

文章の呼応は大きく分けて、文法的な呼応と修辭的な呼応の二となる。後者はテクニク上の問題即ち巧拙であって正誤には関しないが、前者は正誤に与り、往々文理の不通を致す。今日の初等文法においてそれがとりあげられるのは、僅かに所謂係り結びだけであるが、実際においてはもとより左様な単純なものではない。所謂予告の副詞とその被修飾語がそれであるし、指示代名詞の「これ・それ」（この・その）等もこれに与れば、接続詞や接続助詞もこれにふれる。広い意味においては助詞は勿論、諸品詞一としてこれに関らざるはない。ただ今は専ら主語につけるはとがのその述語に対する呼応の正否について私見を述べる。

助詞が吾が国語の特性（膠着語性）を成しているものであることは今更説くまでもなく、随って日本語に関するかぎり、助詞ほど言語文章の論理的構成に多く関与するものはない。故にその用の正否は往々にしてその文の生死にかかわる。

中川団長は中国がはじめてですか

これは画家の中川一政氏が中国に行った時、レセプションの席上で周恩来総理から受けた問いのことばであるという。（「中国へ行った日本油絵展」—38・8・25—朝日新聞）この問いのことばの意味は、額面通りには「あなたの行く国は、世界各国（或は多くの国々）の中で中国が最初の国か」という意味である。周氏の意味せる所が、そうではなくて第一回の訪問の意であることは想像でも分るが、第一中川氏のそれへの返答「否、五十八年光琳展が来た時に来ました。貴方と何回も握手しました」がはっきりそれを説明している。この「が」は勿論はのまぢがいである。しかしわれわれは周氏を笑えない。はが両辞の用を混じっている例は、われわれ日本人自身に

も、一般大衆はもとより、文筆を業としている者、甚だしきは国語専門の学者の文中にさえ見られるからである。

日本人ほど自国語を粗末にする国民はない、と謂われているが、その当然のむくいとして、その語る国語、その綴る国文に誤りが多い。作家の石原慎太郎氏は、その「星と蛇」の中で「テニヲハを間違えても作家は死なない」といつているが、死なないことは確かだけれども、別に自慢にはならない。のみならず、見方によっては一国語愛護という視点に立てば作家の仕事は、それが最も大衆的であるだけに、その責任は甚だ大きい。まして国語が混乱の一路をたどっている今日においては猶更である。筆者の見る所に依れば、作家はテニヲハだけでなく、国語表現一般に対して神経を細かにすべきである。

はは区別辞であり、がは主格辞である。これは今日では既に常識に属する。はの区別辞性は山田孝雄博士によって発見されたと謂われているが、万葉集の編者は既にそれを知っていた。少なくとも気づいてはいた。一勿論この程度では学問とは謂えないが—は音の表記に者字を仮っていることがそれを明白に物語っている。

小竹之葉者三山毛清爾乱友吾者妹思 別来礼婆（万・三）

者は「事を別つ詞」である。説文に云う「別事詞也」と。段注に云う「言、事を別つを主とすれば則ち者と言ひて以て之を別つ」と。別事は即ち区別である。ただはよりは意が重く、説明的意志の表示が実で、「というものの（人、物、事を兼ねる）はどういうものかという」と、「というのはどういうわけかという」とといったような意を表わすに用いられる。

御史大夫韓安国者、梁城安人也（史記列伝）

郭云転相灌注者、蓋以川漬皆水之大者也（爾雅、积水疏）

前者はもの、後者はわけである。ここに着眼すれば、はが区別辞であることは自ら明らかにされた筈である。山田博士の出るまで一千二百年の間誰もそこに気づかなかった、とすればそれはあまりにも迂濶であった。筆者私におもうに、それは国漢両学者が各々その専門の分野

にたてこもって他を顧みなかったからではあるまいか。而してこの病は今日に受け継がれているようである。吾が国においては国漢学は車の両輪である。一方を度外視すれば所詮片輪なものたるを免れない。

余談はさておき、はがの弁は、二と一との間、つまり相手の有無である。

(い) 梅が咲いた

(ろ) 梅は咲いた

(い) (ろ) とも、「梅」が主語たることに変わりはないが、その主語性がちがう。(い) は、その咲いたものが梅であって、他のどの花でもないことを言っている。つまり梅を百花から切り離し(梅に限定し)ているのであり、他の花は全く念頭にない。それに対して(ろ)は、他の花を相手にもって言っているものであり、その用処や文勢(前後との関係)によって、「他の花はどうか知らないが」、「他の花は咲かないが」等にその意が分れるけれども、そのいずれにしても陰に陽に「他の花」を頭におき、それとの対比において「梅の咲いた」ことを言っているのである。この両辞の用法の相異はすべて源をここに発する。今その相異を概観するに、凡そ左の五項となる。

(い) 相対と絶対(上が下がが。下同)

(ろ) 反襯と主張

(は) 対他と排他

(に) 反対と反理

(ほ) 説明と叙述

右の外、それが規定する疑問の相や、その句読への機能の相異等が考えられる。

## 2) はが相異の諸相

### (い) 相対と絶対

事物を区別するには、必ず相手が要る。即ち之を批べることを待つ。主語を規定するには、対象を或一事物にしぼらねばならない。故にはがの分は、一言以て之を蔽えば、曰く「離す」(は)と「即ける」(が)である。之を謂って相対(対立)と絶対(定一)と為すことができる。之を規定するのも畢竟「他からの区別」であるけれども、それ(規定)はしかしヤスパースがいつているように「一を他から区別する」ことである。

小島信夫氏が米国の作家ソーントン・ワイルダーの、

「芸術家とは、最上の生活は如何に生きねばならぬかを知っていて(下略)」という言葉を用いている(江藤淳・文芸時評—41・2・24—朝日新聞)

「小島信夫氏が引用している」というのは、「引用する」という作用が小島信夫氏一人に特定されているか、或

はその言説が、氏の平生に照らして驚異的(おどろき・案外)である一ほかならぬあの小島信夫氏がまあ一といったような場合の言い方である。この文の場合、上下の文勢に観て、そうした言い方への要求は全くない。言者の意図せる所は、単なる「小島氏の見解」(他の人の見解に対する)の紹介に過ぎないであろう。とすれば当然はを用うべきである。

私が中田と古峰さんが二人で歩いているのを見た事があるのですが、私はその事は誰にも話しませんでした(武者小路実篤・「老いたる書家泰山」—新潮・第六巻・第八号)

「私が」とは、他の誰でもなくて私である、の意である。この文にはそうことわるべき何の要求もない。

この歌を詠みただけで、別の気持ちが浮びません(折口信夫・「世々の歌びと」)

「別の気持ちが浮ばない」とは、言者の胸中に「別の気持」が定一されており、今その定一されている「別の気持」が浮ばないことをいう。即ちこの文の中心題目は「別の持気」である。言者の言わんとした所はそうではなくて、「普通の気持」は浮ぶが「特別な気持」は浮ばない、の意であることはこの句の上下の句に観て明白である。とすればこの「別の気持」は単なる「普通の気持」からの区別の対象に過ぎない。当然はに改めるべきである。

私はそれが欲しいといったが、奥さんがコップに砂糖湯をつくって持って来てくれた(坂西志保・「東の人西の人」—38・10・18—朝日新聞)

この文にはがが三用されているが、第一のがは資格をに通うがであり、第二のがは接続助詞であって、ともにとは直接の関係はない。問題は第三のがである。この文の上下両読は、その意情が敵対している—その反意を成すものは第二のがである(「それ」は牛乳を謂う。下文に云う「私は牛乳が欲しかったので」と一敵対は対立の大なるもので、そこには区別の強力な要求が存する。「奥さんが」とは、他(女中など)を排除して「奥さん」に定一した言いぶりである。「他」の否定を意識していないこの文においてはこうした表現は許されない。以上皆亦がのはに改められるべき例である。

出雲の大神が、いつから縁結びの神さまになられたであろう。など考えながら、大社行の夜行に乗る(山田無文—38・9・1—朝日新聞「きのうきょう」)

このがは一見はの誤りに似て、その実は唯に正しいのみでなく下し得て妙である。それはこれが「出雲の大神は縁結びの神さまだ」という言者の心には受け入れがたい古来の言いならわし。世人の通念を承けているものであり、それへの平生のいぶかり(縁結びとはもともと何の

関係もない筈のあの出雲の大神が一体まあいづから…)が發して言となったもので、それは特示性の<sup>が</sup>でなければ表わし得ないからである。ではこの<sup>が</sup>は<sup>は</sup>に易えたら文を成さないかというに然らず、<sup>は</sup>でも立派に文を成し意味はよく通ずる。ただ<sup>は</sup>だと、たといその命題の内質が既定觀念(出雲の大神が縁結びの神であることは、世人の通念であり、既定の觀念である)であっても、之(<sup>は</sup>)を下せばその判定(既定命題)を言者が再現することになるから、ことばとしては、今始めて下された判定、つまり新しい命題となり、上記の「世人の通念」が言外に聞えないために、ことばが「その事実、つまり既定觀念に対する批判」としての性格を失って余情がなくなる。

日本の現代作家の作品が、はたして人生に必要不可欠か(桑原武夫・「文学入門」)

この<sup>が</sup>亦同じ。この文は「文学は人生に必要なり」という仮定を前提として文学作品の中から「日本の現代の作家の作品」の現実を<sup>と</sup>とりあげ(これが<sup>が</sup>の機能である)、以下その要不要を問うているものであるからである。<sup>は</sup>では他国の文学との比較論となる。

右<sup>が</sup>を中心としてその用の是否を説いた。以下はを中心としてその用の是否を論ずる。

自己をはこびて万法を修証するを迷とす。万法すすみて自己を修証するはさとりなり。

これは道元の正法眼蔵の「正法眼蔵現成公案」中の有名な命題であるが、その表現は蓋し不妥である。「万法すすみて自己を修証する」は、「自己をはこびて万法を修証する」を迷として否定し一步前進した境地であり、その意を強めて言えば、猶お「万法すすみて自己を修証することこそ<sup>が</sup>」と云うがごとき意ではあるまいか。果して然らば<sup>が</sup>でなければならぬ。<sup>は</sup>では、<sup>を</sup>、<sup>は</sup>両助辭を互にした対句で、両者が対立して単なる比較論となる。一しかしそれが実は道元の本意で、「修証する<sup>が</sup>」などと特に彼を否定して此を主張する凡俗のあげつらいを排して淡々と二者を並言したところに禅家の妙諦が潜むのかも知れない。それはともかく、<sup>は</sup>は相対性であるから、<sup>は</sup>を下せばその句は必ず何らかの意味で他と対立する。逆に之を言えば、対立性のあるものはすべて<sup>は</sup>を要求するということになる。それはその句中に止まらず、他の句との間においても同じである。対句の主題(主語たると否とにかかわらず)が<sup>は</sup>を要めるのはそれである。対句には形式的な対立性が存するからである。

天勿空勾踐、時非無范蠡。

太平記(巻四)には周知の如く「天勾踐ヲ空シウスル勿レ。時范蠡無キニシモアラズ」と読ませてある。これは日本人の作であり。粹純な漢文を以て律するのは無理か

も知れないが、天と時とは相対しているのだから両方ともハを送って読むべきである。因みに勿はナシと訓ずるのが正しい。(純粹な漢文と視做してのことではあるが)

<sup>は</sup>の対立形成には、左右対立と上下対立とがある。他との區別に任じているのは左右、主題そのものの説明に任じているのは上下である、

梅は咲いたが、桜はまだだ(左右)

彼は田園詩人だ(上下)

前者は説明を要しまい。後者は、「彼は」といえば、「大衆作家だ」・「文芸評論家だ」・「田園詩人だ」等々といったいろいろな答えが予想される。その中から「田園詩人」一つを選び取ったのである。「彼が」が初めから決めてかかり、そこに全く選択作用が行われていないのと大いに趣を異にする。

かく左右上下の別はあっても、対立させ対観することによってそれを定位することは一である。論者或は「後者は、前者が対立に終始する(二)のに対して、二者を結びつけるのであり、結びつけるのは一であって二ではない」と言うかも知れないが、それは結果(句が完結してから)においてそうなのであって、<sup>は</sup>辞自身としてはあくまでも二者を対立させるに任じているのである。つまり対立させ分別する(二)ことに由ってその等一(一)を断ずるのである。等一なると不等一なるとを認識するには、必ず批判(ならべてわかる)に待つからである。<sup>が</sup>が最初から二者(主述)の相則不離、一体不可分を規定するのと同日の談でない。

対立の左右上下は、その享受(聴き手の受け取り方)によって分れることがある。

あなたの妹さんはいい人ですね

これはすなおに受け取れば単なる批評のことば(上下性対立)となるが、すねた取り方をすれば、「妹さんはいい人だと言うと、僕わるいみたいです」(NHKテレビドラマ「幸福試験」での上記「妹批評」への返答のセリフ)に見られるような皮肉な言(左右性対立)となる。

### ろ) 反襯と主張

かく<sup>は</sup>は対立、<sup>が</sup>は規定で、それは平たく言えば「むかう」(<sup>は</sup>)と「きめる」(<sup>が</sup>)であるから、之を数で表現すれば、<sup>は</sup>は二、<sup>が</sup>は一であり、之を動不動で言えば、<sup>は</sup>は相手を常に意識しているから動、<sup>が</sup>は他は眼中になく、専らそれ(主語)を指して此の一に定める(定一性)のであるから不動(不動に言いきめる)であり、内外を以て言えば、<sup>は</sup>は相手を外にもち、その意が常に他に向っているから外、<sup>が</sup>はその意があくまでもその事

物事象（主語）内に止って一步も外へは出ないから内である。之を譬えれば、はは軽薄な人妻の如く、常に他の男性との対比において自分の夫（主語）を視ており、がは則ち貞淑な人妻の如く、自分の夫（主語）一人を見つめている。

スタミナは旺盛だ

スタミナが旺盛だ

前者（は）は「髪は少々薄くなったけれど」といった意味のことばを裏面にもつ。筆者私かに之に名づけて反襯性と曰う。反襯とは互に表裏となることを謂う。後者（が）は言者の眼が専らそのつく所の主体たるスタミナに注がれており（がは主格辞だから、問題としている所はその主語だけで（内）、外に相手を予想せぬ、というよりは初めから受けつけない）他の物事象は一切思惟の外に置かれる。故にその位勢（置かれた立場）によっては「主張」の形を成す。

みんなあたしがわるいのよ

「わるいのはあたしであって、他の誰でもない」の意で、女のふてくさった逆説的なセリフであるが、このことばの外貌は一の自己主張である。「あたしはわるい」は、言者の内界（おもわく）はどうであろうと、ことばの表面は「あたし」を客観してそれに判定を下しているのであって主張ではない。すなわち単なる「あたしへの説明の通告」に過ぎない。勿論判定も意志の表示ではあるが、しかしそれ（判定）は賓辞（述語）に托されているのであって、その主語はあくまでも「区別の対象」に止まる。つまり賓辞が下されるまでは、それ（主語）は「くらげなすただよへる」ものである。

詩は芸術の本質である

詩が芸術の本質である

の如き、亦前者は単なる客観的な詩の性格の説明なるに対して、後者は言者の主観的な主張と見られる。（その位勢によるから一概には言えない）すなわち強く言い易えれば猶お「他の何物でもなく詩こそが」と云うがごとくである。

わたくしが大阪朝日に入社し、先輩諸氏にコテンコテンにやつつけられて、初めて自分が凡才たることに気づいたのです（物集梧水・「懸賞小説当選のころ」—38・3・15—朝日新聞）

下のがは「こと」で承けられていて領格性であるから正しい（下に詳しい）が、上のがははに改めねば文理不通である。「わたくし」の最終述語（本述語）は「気づいたのです」だからである。「わたくしが気づいたのです」とは、「気づいたのは他のだれでもなくてわたくしです」の意で、気づいた者の自分なることの主張であ

る。言者の言わんとしている所はそうではなくて、単なる「そのころの自分」の説明である。

### は) 対他と排他

筆者は上来縷々は必ず他を意識する（相手がある）のに対して、がは他を意識せぬ（相手がない）意味のことを述べて来たが、それはしかし「がが他と無縁である」ことを意味しない。見方によってはむしろ却ってはっきり意識しているとも謂える。というのは、彼を相手にせぬということは、その意が此に専一であることであり、之をその（が）主張性から言えば、自己を主張するということは、他を寄せつけないことであり、此に専一で他を寄せつけないということは、内面的には一の相手意識であり、しかもそれは、はの単なる対立的な相手意識より強力であるからである、是においてかがは、はの対他性に対して排他性がその一性格として定位されることになる。「桜が咲いた」は、「咲いたものの桜である」ことの主張であるとともに、一面「他のどの花でもない」という排地である。あの「みんなあたしがわるいのよ」の如きも、「わるい」のが自分なることを規定する（言いきめる）結果としての自然の他意識として無言の中に他を排している（勿論逆説であるが）のであり、而してその他意識は、それが陰性であるだけに、「あたしはわるい」の陽性な他意識より却って強力である。

明治文学史を私が記述するつもりはないが（福原麟太郎・「文学と文明」—40・2・28—朝日新聞）

この文、もしその意が「他の何人でもなくて」或は「他を押しのけて、特に私が」の意である（排他）なら至当であるが、言者の意は恐らくそうではなくて、汎然と他に対して自分（私）を挙げているのであろう。とすればはに改めねばならない。

### に) 反対と反理

がのこの排他性は、その自然の展開として反理性を生む。

梅は咲いたが、桜はまだだ

梅は咲いたが、桜がまだだ

前者は単なる対比（対立）であるが、後者には「之を難じ、之をいぶかり、之を遅しとし、之を残念がる」等の意が聞こえる。（此等の別はその之を言う時の事情や、その前後の文勢に由る）而してその之を聞こえしめるものは即ちがのもつ反理性である。

いま、銀座で商売している人が、銀座を愛していないこれはかつて某週刊誌で寓目したものである。このがは一見はの誤りのようであるが、その実は正しい。理由は、銀座で商売している人は、理もと当に銀座を愛すべ

きであるのに、今之を愛していない、という現実には理に反することであり、それは特示排他性（他の土地の住人でなく当の銀座の住人）であるがにして始めて表わし得ることであるからである。かく言えば論者或は曰うであろう「はははは区別辞であり、区別という作用は二即ち対立を前提とする。（対立しないものは区別の対象となり得ない）而して対立中には反対（相反する対立）があり、それは反理につながる。『がでなければ反理を表わし得ない』というのは、はははの区別性を否定するものであり、上来の所説と矛盾する」と。はははに反対を言う機能があることは言うを待たないが、それはしかし飽くまでも反対であって反理ではない。反理はおどろきであり、いぶかりである。おどろきやいぶかりは、日が西から出、魚が木に栖むが如き意料の外に出ることにして始めて成し得る概念である。はははは対立辞で、対立には反対もあり、はと言えはそれが相反せる（反対を主として言う）ものなることが既に明白に示されているのであり、随って之を聞く者もそれが相反せるものなることを承知しているのであるから、そこにはおどろきやいぶかりの意情は生じ得ない。而るにがは規定辞で、「しか為し」「しかある」ものが「それであることを言いきめる」ので、時と場合によっては、「そんなことはない」という抵抗反撥が生れ得る。この抵抗反撥が反理の内核である。

### （ほ）説明と叙述（事理と事実）

「何うして又さう思ふんだらう。そんな筈はないがね。君の誤解ぢゃないか」と自分が云った(漱石・「行人」1)

結論から先に述べれば、「筈はない」は是、「自分が云った」は非である。先ず前者から説けば、こういうとき、うっかりすると「筈がない」と言ってしまう。「筈はない」と「筈がない」とは前者（は）は「なかるべき」を言う。（はは区別辞だから）即ち説理であり、その言う所は真理である。後者（が）は「ないにきまっている」を言う。（がは主格辞だから）即ち前者の説理に対すれば叙事であり、その言う所は事実である。行人のこの文の場合、「筈はない」は、そう思う理由（筈）の存せぬ、ことを言っているのであるからそのはは至当である。「自分が云った」は、言者は「事実を直叙する」ためにこの表現を取ったのであろうが、これでは「彼の方」（又は「別の人」）が云ったのではなくて、自分の方が云った」意、即ち「云うべき人」が二人（或は二人以上）あって、その中から「自分」をその言者として特に指し定めた（主格性）言い方となる。この文の場合、そうした特指規定的表現の要求はどこにもない。やはり上文の彼（君）の言に対立させ「自分の言」を写したものと

して「自分は」と言うべきである。

この男には何だか前に会ったことがあるような気がした。突然思い出した。「エイブラハム」と私が言った  
(月と六ペンズー厨川圭子訳)

この「私が言った」も同じである。但だこの場合、対者は汎然としている。

この「説明と叙述」(事理と事実)ははがの用法の相異上重要な地歩を占めているので、上で述べた所と重複する所もあるが、ここにやや詳しく弁じておこう。はは区別辞であるらか議論的で冷やかであり、がは主格辞であるから実際ので生々しい。而してこれは直ちにその句格の成立に関与する。即ちはを用いるかがを用いるかによって、その句の性格が分れる。はは区別辞だからその言う所は理で事理説明(或は論断)の句を成し、がは主格辞だからその言う所は事で、事実叙述(或は描写)の句を作る。

必要はない

必要がない

前者は、不必要な理義を説くのであり、後者は、不必要な現実を述べるのである。もっと詳しく言えば、前者は、必要なべき（理）を言い、後者は、「必要なべき理」に本づく「必要なき実際」を言う。即ち「必要はないから必要がない」のである。

必要がなくとも事実がある（漱石「行人」）

これは現実（現代の不安、即ち科学の発展への恐怖）を  
 言ったものであるからそのがの用は正しい、而してこの  
 「必要」を説くのがはの任、「事実」を叙べるのががの  
 職である。

姉は妹より美しい

姉が妹より美しい

前者は冷然たる説明で感情はこもらない。後者は現実の叙述で、その用処によつてはためいきが聞こえる。「資格はない」と「資格がない」、主語ではないが「やがては云々」と「やがて云々」との如き、皆前者は事理の説明であり、後者は事実の叙述である。

殊に他（他の土地一筆者注）の言語とて、其（その地方一筆者注）方言と同じく日本語であるものゆえ、容易に優劣をつけて、自ら劣れりとする必要がないと説かれませう（上田万年・「教育上国語学者の抛棄して居る一大要点」一講演筆記）

これ前後の文勢に観て明らかなように、「自ら劣れりとする」ことの不必要を論定している（理）のであるからそこには自らはの要求がある。がでは「必要」が中心となり、（主格辞だから）単にその「不必要」を直叙した（事）ことばとなる。もしこのがが生かしたいなら、「劣れりとする」の下に「ことは」を補わねばならない。

そうすれば「必要がない」が述部となり、がは本主格辞の地位から読主格辞の地位に転じてその用が正当となる。（読主格については説いて下に詳かである）

自己の変革のなかにしか勉強というものがあり得ない  
（郡司正勝・「演劇性の流出」—38・3・15—朝日新聞）

このがも同じ。現実の叙述である。言者の意は反対に之を論断するに在るであろう。

月暗楠公墓畔村

これは菅茶山の「宿生田」と題する七絶の結句であるが、簡野道明の和漢名詩類選評釈には「月」にハが送ってある。恐らくこれが古来通行の読方であろう。句意は「月影の暗い」こと（情景）を叙しているのであって、月の状を説いているのではない。即ち叙述（描写）であって説明（論断）ではない。須らく「月暗シ」と読ませるべきである。（がの主格への転出は古いけれども、元来口語辞であるから、文語文には普通用いない。説は下に詳かである）論者或は曰うであろう。「これは作者が月におのれの感情を移入しての、謂わは象徴的手法である。つまり楠公の精忠空しく、その身死して天下北朝に帰したのをおもえば心おのずから黯然となる。その傷ましい感情を今眼前に仰ぐ月影にからませて表現したのであり、それは「月は」と月を批判の対象として待つことによって始めてなし得ることである」と。これは強弁であり、かつ詩趣を損ずること甚だしい。作者茶山の意はそういった感情をこの「月暗」の二字に托しているかも知れないが、しかしその場合でも「ハ」を点して（茶山が所謂「読み下し」でこの詩を作ったであろうことは疑問の余地がない）特に「月」を説明の対象に立てる必要はない。というより、そうした小細工を弄するより、見たまを直叙した方（「ハ」を下さず）が却って感情は深く移入されるであろう。意匠を凝らせば凝らすほど「詩」から遠ざかることは詩の常識であり、万葉と古今を対観するを待たない。もし一句の声調上どうしても助辞が下したいなら（筆者はその必要を認めず、下さない方が声調が緊って好ましいとする）がでは口語的で他との調和を乱すからズを下せばよい。抑も文章は意味が先で、声調は意味に奉仕すべきものである。故に意を害さない限りにおいては声調的はからいは許されるが、それによって意味が犠牲にされるときは、いかに声調が美でも断然之を捨てねばならぬ。

時間が逆にながれ去らない、詩人もまた彼の文章をあたもどりさせるわけにはゆかぬ（立原道造・「堀辰雄の文章」—伊藤整「文章読本」所収）

逆にながれ去らないのは時の真理である。理を説くのにハが必須である。ただこのがもし上述の反理のがで

あるなら、「時間に逆に流れてもらいたいのだが、残念ながら時間の奴吾がこの意に反して逆に流れてくれぬ」といったふくみのある文となり、このままで通用する、というより却って文章が生動する。がしかし、言者にはそれほどの細かい用辞上の心使いはなかったであろう。とすればこれはやはり単なる「現実叙述」として否定されざるを得ない。ところでこのがの反理性活路に関連して想い出したことがある。筆者は上で漱石の行人の「自分が云った」を批判して「自分は云った」と改めるべき旨を述べたが、もしその句勢がそのそう云ったことを説明するとか或は他の言説を相手にもっているとか（ともに対立性）ではなくて、側面からそのそう云ったことを描写せるもの、例えば

「君、僕の考へを間違つると思ふか」と兄さんが聞きました。「左右は思はない」と私が答へました（漱石・「行人」）

の如きにおいてはそれが肯定される、ということである。この場合その主語が言者自身であっても（この文の如く）一向差支ない。それがその叙述（描写）の対象として客観視されているからである。

かくはは説明、がは叙述と言っても、その用処文勢によってはその正否が逆になることがある。

よしんば彼女は三十歳、レオンは二十歳であるにせよ  
（ボヴァリー夫人—村上菊一郎訳）

「は……である」は呼応の正であるが、この場合はその正が却って不正の張本となる。というのはかく判定を下すとそれが現在の事実となるからである。この「彼女は三十歳、レオンは二十歳」は仮定である。（もし実際の年令だとすれば「よしんば」の用があやまりとなる）はをがに改めれば、がは単なる主格辞で判定性がないから、「よしんば……あるにせよ」と上下よく相照応して句意が安定する。

へ）は・がと疑問の相（問語におけるはとが）

××はないか

××がないか

前者は、自分自身が探し求めているのであり、後者は、

（い）人の探し求めている物の何たるかを問うにあらざれば、（ろ）その「ない物」の「××」なることを問うているのである。

すずの器がなかったかな（レ・ミゼラブル—水野葉舟訳）

これ「なかったのはすずの器だったかな」の意である。がは主格辞であるから、「器がない」と言うときは、その「ない」という状態の主体が器であることを不動絶対に位置づける。随ってこの場合、その「ない物」が「す

ずの器である」ことが言者（ミリエル司教）に分っていることになる。而るにユゴーの原文のあの箇所はミリエル司教が「すずの器の有無」を問うているのであり、つまり不明問尋である。不明問尋は区別操作に属するからそこにはは辞の要求が存する。因みに井上究一郎訳には「あの、錫の食器があるでしょう？」とある。これではそのあることが分っていて問うているのであるからがの用が正当となる。

和光、いま持ち合せがない？（茅盾・「もみじは赤い」―竹内好訳）

「いま持ち合せがない？」とは、相手の「僕はいま持ち合せがない」ということばを鸚鵡返ししてその事実を確認するとき用いる問辞である。即ち猶お「何っ、いま持ち合せがないって？」というがごとし。「持ち合せの有無を問う」（原文の意）問辞は「持ち合せはない？」である。

ねえ、ひょっとすると君はチャールズ・ストリックランドっていう画家に出会ったことがないかな？（月と六ペンス―厨川圭子訳）

おまへの親族などのうちに貧賤な人たちがいないか（鈴木虎雄・「白楽天詩解」）

大学内にある独任制・合議制の各機関の権限を明確にする必要がないか（37・7・22―朝日新聞）

何かお土産がないの（奥野他見男―別府夜話）

一日じゅう彼女は自分の気がいじみた情熱を克服し得たことを確め得る機会がないかと思った（赤と黒―大久保和郎訳）

此の類皆同じで、このままではその「ない」ことが分っていて（又は決っていて）今それを確認せんとして問うていることになる。それが言者の意（有無を問う）と異質であることは言うまでもあるまい。

彼は何かうまい遣方がないものかと思ひ（同上）

これは「もの」で承けられており（が……もの）読主（説は下に詳しい）であるから正しい。

日本人にはもともとユーモアがないのか（郡司利男、「国語笑字典」）

これも正しい。理由は、「日本人にはもともとユーモアがない」自体が問いの対象であって、「有無」を問うているのではないからである。論者或は曰うであろう。「この伝で行けば、かの『すずの器がなかったかな』等も亦肯定されるではないか」と。然らず。この解釈を彼にあてはめると、「すずの器がなかった」が肯定的（「うむ、そうかそうか、すずの器がなかったのか。そうかそうか」の意）となる。

と）は・がの対句読の諸機能

イ）は・がとその句読の重点

はは区別辞で判定を予想しているから、その句読の重点は述語に在り、がは主格辞であるから、その句読の重点は主語に在る。

甲は乙である

甲が乙である

前者においては、言者の目的は甲の内包（作用・状態）の乙たることを説明するに在り、後者においては、甲を他から切り離して独立させることによって、その乙との関係が絶対不二なることを規定するに在る。

給仕がいなくて困っています。どこかいい女の子はいないでしょうか。

「いない」者が「給仕」であることを訴え、「女の子」の有無を問うているのである。

読んだこともない小説を、ほめることができるはずはない（中村真一郎・「小説入門」）

中心は「ほめること」と「ない」に在る。

夏の頃その影を映して、いと涼しく見えし河水は、先づ凍り初めたりとなり。

これは和漢朗詠集、巻上の「おほぞらの月の光のさむければ影見し水ぞまづこほりける」に対する金子元臣、江見清風合著の「新釈」の解釈である。「河水は」は下の「凍る」という作用に重点をおいた表現で、そこには何の不都合もない。わざわざここにとりあげた所以は、歌の字面が「水ぞ」であるからである。ぞはがと同類で、「水ぞ」は重点を「水」においた表現である。

は・がの句読の重点が「は述が主」なることは上述の如くであるが、これはもとより一般論であり、謂わばは・がの先天的論理であって、もし之に外部から特殊な事情「謂わば後天的論理」が加わる時は、それにこれが左右されてこの規定が変更されることがある。その位勢（おかれた立場）に本づく読みの強弱（中国語における念の軽重）の如きが是れである。特に口頭語においてはそれがかなり大きな発言権をもつ。

ヴィルヘルム君、われわれを快くするもの、それが幻であろうか（若きヴェルテルの悩み―佐藤通次訳）

「それが」は、「それは」の、重点が「幻」に在って「快樂夢幻論」（快樂は夢幻なり）なるに対して「快くするもの」に重点が在って「夢幻快樂論」（幻とは何ぞ。快樂即ち是れなり―他の何ものでもなく快樂こそが幻である）であるが、もしがを重念するときはその句勢が詰問性を帯び来って、その意猶お「われわれを快くするものそれを幻などと呼んでいいものだろうか―僕はそれに左袒することはできない」というがごとく、重点ははの

場合と同じく「幻」に在ることになる。この文の場合それ（快樂夢幻論）と見るべきであろう。

ロ) 読の主語とは・が

文が単文・連文（重文）・複文の三に分れることは今更説くまでもない。所謂「読」は複文の従属句（クローズ）の謂いであり、その主語を、本句（センテンス）の主語（本主語一本主）に対して読主語（読主）と謂う。読主は原則として一外的要求のある場合を除き一がを取り、はは之を拒否する。先ずそのはの拒否から説けば、はは区別辞であるから、その句（は辞の句）が他の句へ連る場合には、一応その主題への区別判定の任を了って、而る後にそれへ連る。盲目的な従属は之を拒否する。はこの従属拒否がそのまま読主からの演出拒否となつてはねかえつて来る訳である。それは読というものは、いかにそれ（読）が長くとも、その性格は一単語に等しく、之を切り離すことのできないもの（一）であるのに、はは区別辞であるからその主述間が恰も裁く者と裁かれる者との如く相対立しており（二）それが句中に入るとその上下を切り離して二とするからである。故に読でも文勢上に区別的な要求が存するときは、その主語はそれに従つてはを取る。

雨はふっても私は行く

「雨はふっても」は「行く」への副詞読であるが、一面下の「私は行く」に對立しておりその勢が連文的であり、連文は「山はくれ野はたそがれの薄かな」（蕪村）の如く独立せる二個の単文を、行文の都合や修辞上の目的から形式的に連結して一組としたに過ぎず、その意は各々独立で他の句の従属物ではない、即ち対等で主従関係はないのだから、はをその主語に辞として取り得るのである。こうした外請のないかぎり、はは絶対に読主に辞たり得ない。而してこのことは適にががそれ（読）の必須要求であることの反証となる。ではがが読主の必須要求たる所以は何か。

筆者の見聞の及べる範囲内では、吾が国語のが辞を除く外、所謂主格辞はない。吾が国語と雖も初めは主格辞をもたなかった。それががという主格辞をもったのはかなり古いようで、源氏の若紫の巻の

いとうよう似奉れるがまもらるるなりけり。

の如きもその例として挙げられるが、ずっと古くはなかったことは確実である。然らばその主格辞がはそも何処から出たのであろうか。言うまでもなくそれは領格のがの進出である。今その進出の過程を考ふるに、蓋し「之を領する」ということは「是に主たる」ことであるに因る。抑も領する（所有する）ということとは「離さぬ」ことであり、（離せば領することはできぬ）それはつまりそれ（被領者）に主たることである。一面それに主（主

語）たることはつまりそれを領することである。（主人とは、その領者（所有者）の名である）則ち領属関係と主述関係とは本質的には同一なのである。例えば「風が吹く」、「夜が長い」の如き、前者においては、「吹く」は風の所有せる動作であり、後者においては、「長い」は夜の所有せる状態であるのである。その領格との相異はただその所有の対象が、彼（領格）は体（事物一名詞・代名詞）であるのに対して、此（主格）のそれは用（作用状態—動詞・形容詞一名詞や代名詞である場合もあるが、その場合でも用言性なる繫辞を伴う。その之を下してないのは省略）であるというに過ぎず、その所有主たるは一であり、ともに上下密着不離である。因つて思うに、主格のがも、その進出の初頭においては、その結び（述語の語尾）には連体形を要求したのではあるまいか。連体形は準体言である。がと同類なるの（筆者はの・が同根説を早くから抱いている）がその結びに連体形を要求する（これについては、拙著「漢文訓読の研究」854～857に詳しい）のもその旁証とするに足るであろう。

わたしはその雅号を彩牋堂主人と称へてゐる知人の愛妾お半といふ女が又本の芸者になるといふ事を知ったのは（中略）外濠の方へ行きかけた折であつた（永井荷風・「雨瀟々」）

「わたしは」とは、「わたし」の「他」との区別か、或は「わたし」の状態説明への意志表示である。この文の場合他に「わたし」に對立している者はないから前者ではない、とすれば必ず後者であるが、それなら「知ったのは」という第二の主語が現われる前に句が完結されていなければならない。このままでは一句二主となる。はをがに改めれば「わたし」が読主となって二主の非論理から免れる。

さればアメリカは、此際日本のために、荆棘の道を押開き、日本人をしてその処を得せしむるべく努力する事は、単に大国としての義侠心とか、雅量とか云ふばかりではなく、アメリカ自身の国策としても、最も賢明なる方法と云はねばならぬ（徳富蘇峰・「勝利者の悲哀」）

私は後から声を掛けた時、兄さんはすぐ立ち上って「先刻は失敬した」と云ひました（漱石・「行人」）ただ私はここでコクトオの言葉を引用した理由は、スタイルは決して忽せにしてはならないと同時に、また反面決してスタイルのためのスタイルということに走ってはならぬと言いたいからである（川端康成・「新文章読本」）

私はいまさらに、作者にとって文章は命である、との感（同上）



それなのに芥川龍之助さんはじめ近代の諸作家はこれに留意し、現代の息吹きを吹き込んでようやくこの物語（今昔物語一筆者注）の価値が再認識されるに及んだのである（今東光・「一冊の本」—38・10・27—朝日新聞）

この諸例亦皆同じ。このままでは皆一句二主となる。

江戸の連中は、やきやきしているのはよく分る

これはかつて放送されたNHKのテレビドラマ「赤穂浪士」における「大石由良之助」のセリフである。原作者（大仏次郎）の失か、演出者の誤りか、ただしは役者（長谷川一夫）の一時の言いまちがいか、いずれか知らないけれども、上のはががに改められねばならないこと前五者に同じである。このままでは、「誰かのやきやきしている」のが江戸の連中によく分る、の意となる、それがこのセリフの志向せる所に背馳するものであることは説くまでもあるまい。論者或は「江戸の連中はさぞやきやきしているであろう。それは私にはよく分る、の省略である」と曰うかも知れないが、そんな大飛躍は、韻文ならともかく、散文では許されない。

人間であることを憎しみ、のろうなにかがないか（田村泰次郎・「シャガール展を見て」—38・10・12—朝日新聞）

言者のつもりは「なにかがあるのではないか」（読主—領格）というに在るであろうが、これではその意は表わせない。「なにかがないか」のがは主格であり、随ってその「なに」は本主である。主格は決定権（定一性）を有するから、「なにかが」と言うときは、単に「なにか」というのと異なり、その「なに」は暗に決っているものであり、今その決っている「なに」の有無を問うていることとなる。而もそれさえあまり明確な表現ではない。要するに文を成さない。

右は本校を卒業したことを証明する。

これはある高校の卒業証書の文面である。「右」は卒業者の代名詞的な用法であり、その内包はその右に書かれた卒業者の名と之を一にするから、文理の自然に従って厳密に之を解すれば、卒業者が自ら証明することになり実際の証明者たる学校長は宙に浮いてしまう。証書の文面は之を普通の文章に改めれば、

右の者が本校を卒業したことを、学校長何某は証明する。これはその証明書である

となるから、「右」から「卒業したこと」までは客語読である。とすれば「右は」を「右が」に改めることによって問題は解決する訳であるが、それ（右が）では証明書というものの性格に副わない。というのは、証明ということは区別性の事象（句としては説明句）であるから

そこには自らは辞の要求が内在するからである。でははを生かしてこの文を論理的に秩序づけるにはどうすればいいか。凡そ四つの表現が考えられる。

1. 右は本校を卒業したことを証明される
2. 右は本校を卒業したものであることを証明する
3. 右は本校を卒業したので（これを）証明する
4. 右は本校を卒業した。よって（ここにこれを）証明する

（1）は受動態でバタ臭い。（2）と（3）は身分証明書などならいいが、卒業証書としてはあまりにそっけない。筆者は（4）を採る。やや固いけれども折目正しく、卒業証書なるものの内面論理（その人の一生を支配する貴重性）とよく一致し、かつ文にしまりとリズムがある。勿論「（ ）」内を加えた場合の話である。簡潔は一つの貴重な文の徳であり、省略は一つの修辞であるけれども、詩歌や俳文の如き芸術的文章なら格別、普通の文章においては飽くまでも達意を主とすべきである。況して文理を乱り論理を傷つけるが如きは断じて許されない。

筆者は上で読でも文勢上に区別的要求が存するときは、その主語はそれに従っては取る旨を述べたが、ここにはの要求の絶対的なものがある。醒目（特に目立たせる）の目的から特に提げ示された目的語がそれである。読は上下の密接不離（一語性）を欲するが故に、一般的には生木をさくが如き区別辞の介在を拒絶するが、目的語の提示はそれを特に目立たせんがためであるが故に上下を緊結する（緊結すれば一体となって区別がつかない）領格辞の介在を許さない。

私は何がさて措いて自分の生活を根柢にして歌ひたいと思ふ（前田夕暮・「収穫」再版附記）

「何」は「措く」の目的語、即ち措かれるものである（何を）。醒目を欲するなら必ず「何は」と言わねばならない。「何が」では「何」が主語（「措く」の）となり、文を成さない。これは目的語の問題であるけれども、は・が用法の弁につながるので一言之に及んだ。